

十二月感泣集

年齢

算用数字で書くと

六十一のさかさまは十六

七十一のさかさまは十七

どちらの年齢もすぎてゐる僕であるが

少年である十六の僕の声が僕をいましめる

「納屋に学校カバンをかくして家出した事を
巖頭に立つて波を見下ろした事を
ワスレルナ」

竹

黒い鉄棚のあひだから手をさしのべて

僕は竹の幹を握る

感触をたのしみ 気もらふ

家の者も同じことをする

「あれは去年さはってみた竹なのに手がとどかなくなった
一昨年のはあんな所に行つてゐる」

「竹つて移動するものかしらね」

家の者と僕の散歩道は定つてゐる

井田川を上田橋で渡つて左折する

右側に移動する竹がある

追悼

1 佐野 晶

佐野竜馬の住んでゐる千葉と

僕の住んでゐる川崎とは 近いやうな 遠いやうな

いつか 電話をかけたら 晶さんが出て

「佐野はいますぐ参ります ちよつとお待ち下さい」と言つた
しばらく時間がすぎて 電話はつながつたまましづかだった

ふたたび晶さんの声がした

「いま こちらではちらちら雪がふりはじめました」

「さうですか」

僕は千葉にふる雪を心の中に描いてゐた
雪片の大きさや その速度を

貴女がおなくなりになつたといふ 悲しいしらせを受けました
今度は僕の方からおはなししてもいいでせうか

「川崎の方はあの時と同じやうな曇り空です もしかすると貴女のゐらつしやるところで
は ほたるがとんでゐるのではありませんか」

「いま こちらではしづかに ほたるがとびはじめました」

2 佐野竜馬

佐野君は中央公論社の編集者として

「日本の詩歌」「書道芸術」「文人画粹編」などを担当した

僕はその手つだひをした

佐野君が最後に編集したのは 佐野晶「自然の恵み・祖母の為に祈る」である
感じのよい造本である

そこに僕の追悼詩が印刷されてゐる

佐野君にしても僕にしても考へてもみなかつたことである

浅草で食事をして別れた時佐野君のうしろ姿にたよりなさを感じた

年譜を読んでわかつたことであるが

当時すでに身体に不調をきたしてゐたらしい

歩き方もゆつくりしてゐておぼつかなかつた

二人は楽しい夕食をしたのだ

僕はそれでよかつたのだと思ふ

ほたるは ゆつくりと飛ぶ

もしかするとあの頃から 佐野君は

晶さんの前をしづかに すぎて行つてゐたのかもしれない